■象形文字

“甲骨文”や“金石文”は、たいてい、絵に近い形の線や点で書かれてゐる。それで、「形を象(かたど)った文字」といふ意味で、このやうな文字を“象形文字”と呼ぶのである。

はっきりとした形のある物は、たいてい、この“象形”といふ方法で“文字”に表現することが出来る。虎や豹などでも、甲骨文では、一目でそれと判るやうに、見事に特徴をとらへて表現されてゐる。

これらの象形文字に属する漢字は、スメール文字やエヂプトの聖刻文字、インダスの絵画文字にとてもよく似てゐる。それで、最初に作られたスメール文字をそのままそっくり真似たものであるといふ意見があるわけであるが、然し、「物の形を象った結果、同じやうな文字になった」と考へる方が自然であらう。

さて、「昔は文字のことを単に“文”と言った」と述べたが、“文”といふ文字は、点と線とを交錯させた形を表した文字であって、本来は“模様”といふ意味を表した文字であった。“縄文式土器”の“縄文”は“縄模様”の意味であって、これが“文”の本義だったのである。

ところが、“文字”も、やはり「点と線とを交錯させて作ったもの」であって、一種の模様と見ることが出来るので、それで“文字”のことを“文”と呼ぶやうにたったものである。